

KYOTO HIYOSHI KIHATA

生畑

A to Z

ホタルの飛びかう自然豊かな里

きはた

生畑

世木の里づくり委員会

prologue

“生畑”は50数世帯の『限界集落』です。

子育て世帯は数戸しかなく、老夫婦や独居老人世帯、
無住家屋、不在地主農地、

そして荒廃森林が目立つようになりました。

昼間でも鹿や猪に出会うことがあります。

でも、この山里には、野草や樹木の花が咲き、
初夏にはホタルが乱舞。

小川のせせらぎと共に小鳥たちが囀る、
かけがえのない原風景があり、
とけ込むように古来の奉りごとが行われます。

そして、区組織、消防団、体育振興会とともに、
老人クラブ、育友会などの団体が
元気に活動しています。

生畑

だから、盆踊り、運動会、歩こう会、

グラウンドゴルフ大会など、区民交流のイベントが盛会です。

きっと、ここの住民は、この“むら”で暮らすことに
豊かさを感じ、誇りをもっているに違いありません。

いま、50数戸の内、

10数戸は移住者や陶芸家などの2拠点生活者です。

そして、これから田舎暮らしができる、
茅葺屋根の古民家が維持されています。

お米や野菜づくりができる、
整備された農地が保全されていますし、
共同で農作業、炭焼き・薪割り、
シイタケ栽培などを行うグループがあり、
活動に参加いただける人を待っています。

私たちは、移住者の方々と共に、
“丹波山麓のイーハトーブ”を
創造していきたいと思います。

区民一同

A AOIHOUSEKI
青い宝石(カワセミ)

B Bean
特産の豆類

C Cherry
千本桜

D DOU
お堂

E Energy
炭焼小屋

F Fire Fly
ホタル、水辺の生物

G GYOUJISYOKU
行事食

H Hostel
宿泊施設

I I + Turn
ターン

J JIZOUSAN
お地藏さん

K KARAUSU
唐臼

L Lessons
手芸教室

M MURYOUJI
無量寺

N NYOIJII
如意寺

O ONSEN
記憶の中の安鳥温泉

P Person
偉人

Q Question
“生畑”の由来

R Rock
鉱石と希少鉱物

S SANYASOU
心癒される山野草

T TAIMATSU
松明(火とぼし)

U UMEWAKAKE
梅若家を支えた村

V Volunteer
ようきはったカフェ

W WA
老人クラブや育友会

X X?
謎?

Y YAMANOKAMI
山の神

Z Zigzag
峠道



野良にいと、川面近くを高速で飛び去る鳥に出くわすことがあります。稀に、川岸の枝や石に止まりキョロキョロ。カワセミです。鮮やかな水色の体と長いくちばしが特徴で、美しい外見から「溪流の宝石」「青い宝石」と呼ばれています。時に“火の鳥”のような明るい赤茶色の鳥に遭遇することもあり、生畑には沢山の野鳥が生息しています。

A 青い宝石(カワセミ) AOIHOUSEKI

古くから水稻の畔周りを利用して自給用の白豆、黒豆、小豆などの豆類が作付されてきました。生畑の土壌は、豆の生産に適していると先人からの言い伝えがあるほどです。近年、減反政策の一環で、田畑転換により出荷用の黒豆や大納言小豆を生産する農家や生産集団があり、黒豆の一部は枝豆として直売所などに出荷されています。

B 特産の豆類 Bean

生畑の中心に位置する場所に、珍しく貴重な樹齢90~100年の「香り桜」「匂い桜」があり、甘い香りを漂わせて人の心を和ませています。生畑では“桜で地域をつなごう”との思いから桜の植樹を続けており、春になれば「生畑・千本桜」として、人と人とのつながり、心の花を咲かせています。

C 千本桜 Cherry



下稗生のお堂は、稗生谷と小畑谷が出会う場所にあることから出合の地蔵さんと呼ばれます。安置されている朝日地蔵尊は、上稗生の山寺から流れてきたという不思議な言伝えがあります。安鳥のお堂は、天井も戸板も落書きだらけで、安置されている観音様も子供たちと一緒に遊んだのか?泥だらけ。二つのお堂からは、お彼岸やお盆には御詠歌の鉦が静かな山里に響きます。

D お堂 DOU

炭焼集団『里まる』は、2013年に上稗生・安鳥の有志で結成され、手つかずの共有林を借り受け、炭焼の匠・湯浅長年氏指導の下、炭焼窯を作り上げました。日々研鑽に努め、2016年開催の全国育樹祭では、「里まる炭」が記念品に採用され、生産が追いつかないほど好評を得ています。『里まる(環)』には、炭焼文化継承と、里山活用による資源・自然の循環の意が込められています。

E 炭焼小屋 Energy

生畑は、淀川水系大堰川の源流域に位置し、初夏、区内全域でイルミネーションのように源氏ホタルが乱舞します。また、清流の水生生物として、サワガニやアブラハヤと共に、淡水魚のカジカやカジガエルがみられ、サンショウウオが棲んでいることも確認されています。

F ホタル、水辺の生物 Fire Fly

大豆を茹で、藁ツトに包んで発酵させた自家製納豆。そして、塩味納豆をお餅で包んだ“まくり餅”は冬場の伝統食です。お彼岸定番の牡丹餅・おはぎ、田畑の植付を終える節目の半夏生には、クマザサで米粉団子を包んで蒸した粽、収穫を祝う秋祭など晴れの日に食べる鯖寿司等。自家製の納豆や粽を作る家が少なくなってきましたが、先人の贈り物・ふるりの味を残していきたいものです。

G 行食事食 GYOUJISYOKU

日吉山の家は、1981年、先人が生畑の活性化を願って誘致していただいた社会教育活動施設で、現在は南丹市の観光施設として指定管理者が運営されています。本施設以外にも、農家民宿が2軒あり、いずれも、のんびりした田舎暮らしが体感できる家庭的な古民家です。生畑には四季それぞれの味わいがあります。ぜひお越しください。

H 宿泊施設 Hostel

生畑区の世帯・人口は、100年前では90戸500人であったものが、現在では50数戸、140人と過疎化が著しく、空き家や耕作放棄地が目立つようになりました。移住してこられた家庭をはじめ陶芸家などの2拠点生活者、そしてUターン者が延べ14世帯あります。新旧の住民が助け合って、心豊かなむらをお次代に引き継ぎたいものです。

I ターン 一十TURN



生畑のあちこちに可愛いお地藏さんがあり、近隣の住民により大切に守られています。上稗生から京北へ向かう峠の分かれ道には「霧なし地藏」があり、旅人を霧から守って下さったと伝わっています。小畑の無量寺の近くにある丸い石に彫られたお地藏さんは、時々道端まで転げ落ちられますが、失せ物を見つけるご利益があるそうです。

J お地藏さん JIZOUSAN

土間に埋めた石臼と、杵を棹木の先端に取り付けた農具。棹木の支点の一方を足で踏むことで杵を蹴り上げ、その重力で餅つきを行います。年末には家族や親せきが集まり、お正月のお餅つきの楽しみでした。餅つき以外にも、粳摺りや精米、はったい粉作りなどに利用されてきましたが、今では絶滅が危惧される農具の一つになりました。

K 唐臼 KARASU

区民の趣味と社交場を兼ねて、生活改善センターの一室で、毎月1回、講師を招いて編物を中心とした手芸教室が開かれています。毎回、賑やかにお喋りをしながら手を動かされています。完成まで数カ月が必要ですが、出来上がった時はとても嬉しそうです。また、年に数回、一日で完成する小物づくりを楽しむ有志グループの活動もあります。

L 手芸教室 Lessons

小畑谷の世帯が檀家の浄土宗無量寺は、古くは寺号が長福寺で、創建不詳、1616年中興、1716年に無量寺に改号との古文書記載があります。彼岸念仏、川講、施餓鬼、十夜念仏の法要や宝物である大般若経六百巻の土用干しなどが行われています。また、寺の川向いの山麓には、1670年田原多治神社祭神の分霊を祭神として勧請し創建された多治神社が鎮座し、木彫り狛犬が祭神を守っています。

M 無量寺 MURYOUJI

1392年鎌倉時代に創建された真言宗大覚寺派の古刹寺院で、稗生谷の檀家により管理されています。平安時代から室町時代の収蔵品が豊富で、1154年に書写された大般若経や木造懸仏、江戸時代の池坊生け花手本写しの立花図鑑等があり、日吉町郷土資料館で保管されています。また、隣接して八幡神社が祀られています。

N 如意寺 NYOJI

1960年頃、「硫黄の匂いがする。掘ってみよう」と話がまとまったことが安鳥温泉の始まりです。温泉浴場は完成しましたが、先人たちが夢見た賑やかな温泉街は実現せず、残念ながら数年で終えてしまいました。しかし、時を経て、その泉源は日吉山の家に受け継がれ、今、日吉町内外の来客を癒す温泉となっています。春になると、泉源近くに植えた桜が満開の花をつけ、当時は偲ばせてくれます。

O 記憶の中の安鳥温泉 ONSEN



生畑ゆかりの偉人では、江戸期に上稗生村の領主であった能楽家元の梅若家が有名ですが、他に、江戸期に園部藩小出家を支えた大庄屋で苗字帯刀を許された船越喜平次忠勝、明治22年(1889)の町村制施行により発足した世木村の村長で、初代の湯浅清兵衛(写真)、10代目の船越彦太郎、21代目の湯浅利三郎の名前が世木村史に掲載されています。

P 偉人 Person

なぜ『生畑』(キハタ)と言うの?その答えは、世木村誌に次のような記述があります。江戸期まで世木の庄に属していた下稗生・安鳥・上稗生の三村と、田原の郷に属していた下小畑・上小畑の二村が、明治8年(1875)に合併し、“[稗生]の[生]と[小畑]の[畑]の二文字をとって『生畑』の名を附し、「キハタ」と読む”とあります。

Q “生畑”の由来 Question

生畑には、不純物が少ない良質なマンガン鉱石が産出し、高値で取引されていました。古くは、舟や筏の上荷として精錬施設へ届けられ、道路整備や鉄道開通以降は、殿田駅(現・日吉駅)まで牛車で運ばれていました。硅石も掘られていましたが鉱床が少なく、マンガンも掘りつくされ、戦後まもなく衰退消滅しました。また、西日本では非常に珍しく貴重な花崗岩質岩体が露出しており、保存が必要だそうです。

R 鉱石と希少鉱物 Rock

近年は、自然災害や鹿の食害等で多くの山野草が失われてしまいました。数年前にはあちこちで咲いていた笹百合も今では見当たりません。群生していた九輪草も、水害で半分が流出してしまいました。そんな時、節分草自生地の発見は明るい話題です。野良仕事の合間に腰を下ろした畦、指先に触れる野の花。ふる里の景色をいつまでも残したいものです。

S 心癒される山野草 SANYASOU

上稗生集落で8月24日の地藏盆に行われる火祭りの神事です。夕暮れに各戸数束の松明を持ち寄って、八幡宮の向かいの川を渡った山裾に、酒、米、塩をお供えし拝礼した後、松明に火をとぼし、神社へ向かい、小川ぶちに並べます。薄暗がりになかなか幻想的で風流です。また小畑地内でも、1955年頃まで万灯明(マンドンマツ)という火祭りがありました。

T 松明(火とぼし) TAIMATSU

生畑東端の上稗生集落は、江戸期において能楽・梅若家の百石の知行地でした。また、梅若家中興の祖、玄祥の末娘である勢津が産後の肥立ちが悪く、当地で没し埋葬され、後に玄祥も側に埋葬されたと伝わっています。菩提として大通寺が開かれましたが廃寺となり、その地に玄祥没後50年の1713年、孫の宗友(勢津の長男)が現存の紀恩碑を建立しました。

U 梅若家を支えた村 UMEWAKAKE



里山の花ごよみ



3月

節分草(セツブンソウ)
狸々袴(ショウジョウバカマ)
春蘭(シュンラン)
馬酔木(アセビ)

4月

錨草(イカリソウ)
一輪草(イチリンソウ)

5月

浦島草(ウラシマソウ)
延胡索(エンゴサク)
地海老根(ジエビネ)
九輪草(クリンソウ)

6月

紅花山芍薬(ベニバナヤマシャクヤク)
丘虎の尾(オカトラノオ)

7月

振花(ネジバナ)
実苺答利斯(ジギタリス)

8月

釣鐘人参(ツリガネニンジン)
仙人草(センニンソウ)

9月

不如帰(ホトギス)
曙草(アケボノソウ)

10月

竜胆(リンドウ)

11月

冬の花蕨(フユノハナワラビ)

生畑の中のみんなの居場所として、毎月、「カフェ」を開催しています。「ようきはったカフェ」は、「ようきはったなあ」とみんなが声を掛け合える場所、身近で気楽に集える場所です。四季折々の催しや、生畑に伝わる郷土食作り、長老から語り部として昔話を聞くなど、生畑の人と人の心を笑顔でつなげています。

V ようきはったカフェ Volunteer

安心して安全に暮らすには、そこに暮らす人の和が大切です。そのため元気で健康な老後そして長寿を目指す「生畑老人クラブ」や子供たちの健やかな成長を願う「生畑育友会」が活動しています。育友会では、子供達と共にバス停に草花を植えることで、集落の景観づくりや活性化にも取り組んでいます。

W 老人クラブや育友会 WA

下稗生から安鳥集落へ行くまでの険しい谷筋には、いくつかの謎めいたスポットがあります。そこは「おしょごの鏡」「袖ぼぎ」「爺のふところ」と呼ばれるスポットです。一体、ここにはどのような出来事や言伝えがあるのでしょうか？ この謎を解くために、ぜひ一度生畑を訪れてください。

X 謎？ X?

昔から林業で栄えた生畑には、それぞれの集落に山の神が祀られています。下稗生の一ノ宮、安鳥の入口、上稗生の的場、多治神社境内裏、上小畑の奥山に存しています。今でも山の口講が催行されています。櫛の束に小石やお洗米を包んで藁縄でくくりつけた歳柴を、山の神の前で焚いた松明にかざして豊作を祈ります。山の神は田の神でもあるのです。

Y 山の神 YAMANOKAMI

山に囲まれた生畑では、車道が整備されるまで、ジグザグに巡らされた峠道と里道が生活道として利用されてきました。今では最も奥地の上稗生ですが、鉄道や車での移動が普及するまでの徒歩移動の時代では、矢代峠を越えると、なんと！京の都に一番近かったのです。牧山から都へ抜ける引尾峠、五ヶ荘谷へ至る桜峠、柏木峠、明日谷峠などがあります。

Z 峠道 Zigzag



誇

ほこり



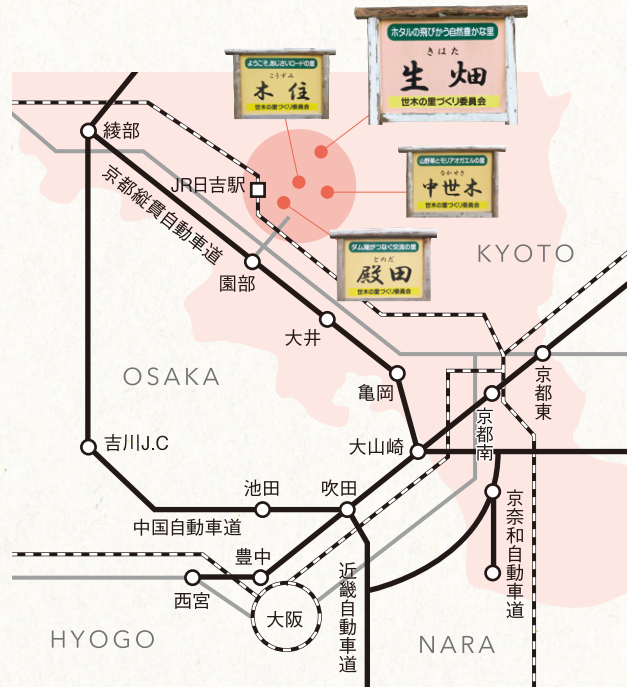
村



むら

絆

きずな



電車で

JR京都駅から山陰本線(嵯峨野線)で約60分
JR大阪駅から約1時間30分
最寄駅/日吉駅



車で

京都市方面から京都縦貫自動車道(園部IC)で約30分
最寄IC/園部IC

生畑AtoZ

発行日 2019年3月

制作・発行 生畑区
〒629-0331 京都府南丹市日吉町生畑天王29
区長 吉田進(090-8880-3078)

協力 塩見直紀
(半農半X研究所代表、福知山公立大学特任准教授、
総務省地域力創造アドバイザー)

表紙写真 2019年2月25日撮影
生畑生活改善センター上空120mから
撮影協力者 高見澤陽平氏

販売価格 100円

